週刊新聞 直言

本紙の責任及覺悟

暴横なる抑壓、陰險なる迫害は、日本社會主義者をして、一朝にして二個の機關紙を失はしめたり、諸君の知れるが如く、片山潜君の雜誌『社會主義』は變じて『渡米雜誌』となり、平民社の『平民新聞』は自ら其發行を廢せり、而して『日本社會主義の中央機關』てふ大責任は、忽ち本紙『直言』の肩上に置かれぬ

本紙は日本社會主義の機關紙中、創刊日最も淺くして、發行の部數は最も少なく、其發達は極めて遲鈍にして、其勢力は極めて微弱なる者也、本紙元より自ら之を知る、而も本紙は之を以て決して本紙の使命責任を避躱す可らざる也、古人言へるあり、一日存すれば一日の務を盡すと、本紙亦今日本紙の言ふ可き所を直言し、爲し得べき所を直行して、殪れて而して已まんのみ

且つや此時に於て、深く本紙の心意を強くせしむる者あり、何ぞや、曰く、彼已氏の決して見ること能はず、聞くこと能はざる氣運てふ者の、明らかに熟し來れること、其一也、曾て『社會主義』及び『平民新聞』に向つて集注せられたる滿天下同志の同情と助力とが、更に本紙に向つて傾倒せらるゝこと、其二也、而して從來本紙に從事せる者の外、平民社同人を始めとし、凡そ現に社會主義者にして文事あるの諸君が、擧げて本紙の爲めに執筆を特約せること、其三也、嗚呼、是れ本紙に取て、天時、地理、人和、倶に之を得る者にあらずや、如此にして猶ほ起たずんば、將た何の時をか期せんや

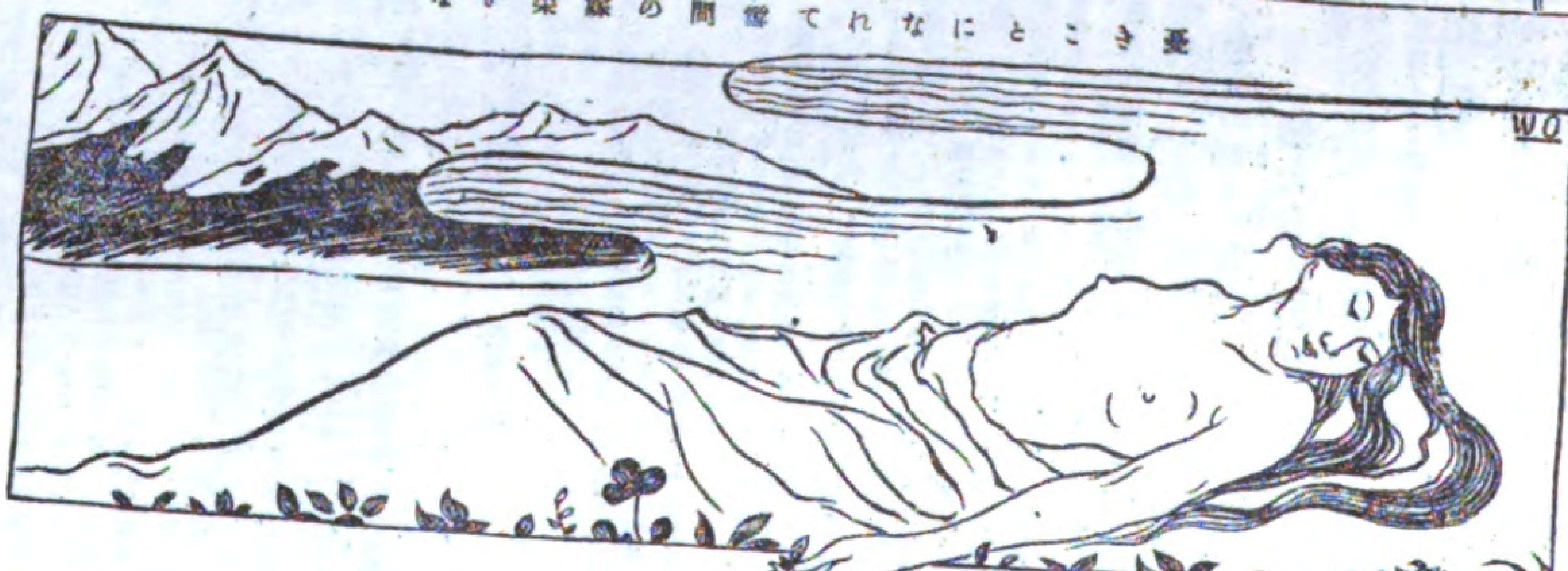
『平民新聞』其創刊に序して曰く、『故に平民新聞の物たる、其編輯は予等之に任ずと雖も、予等は決して之を以て予等の私有と爲さずして、滿天下の同主義者が公有の機關と爲さんことを望む、其社務は予等之を處理すと雖も、予等は滿天下の同主義者を遇するに、皆な我社員を以てせんことを欲す、而して其紙面は常に滿天下の同主義者の爲めに、忠實なる代辯者たり、通信者たり、更に能ふ可くんば其助言者たり、指導者たるに至らんことを期す』と、本紙微力と雖も、期する所亦實に如此し

然り、今日以後の本紙は、獨り滿天下同志が公有の機關たるのみならず、實に其中央の機關たる者也、否な中央の機關たるのみならず、實に其唯一の機關たる者也、本紙の責任や大也、本紙は此大なる責任を全くせんが爲めに、即ち今月今日を以て、編輯社務に於て一大刷新を行ひ、發行回數を增加して週刊となし、紙幅を擴張して平民新聞大となし、更に材料を精選し、體裁を改善し、以て一飛躍を試みんとす、本紙の云爲する所、果して自ら期する所に合し、同志の望む所に副ふとを得ば、幸ひ甚し

本紙は日本社會主義の中央機關也!!!

事業文章、隨身銷毀、而精神萬古如新、功名富貴、逐世轉移、而氣節千載一日、君子信不當以彼易此

憂きことになれて雲間の綠柔かな



天薄我以福、吾厚吾德以迓之、天勞我以形、吾逸吾心以補之、天阨我以過、吾亨吾道以通之、天且奈我何哉

萬國勞働者團結せよ

山口孤劍

四海同胞たしらめよ
富も權力も光なく
歡喜の汗は打ち揮ふ
鐵槌の下より流れいで

自由に生れ愛に活き
光榮の臥床に逝かしめよ
悲愁の衣を脫ぎすて、
永久にたのしく平和ぎて

我が手も足も希くば
十五億なる同胞の
「進步」の爲めに「幸福」に
動かさしめよ振はせよ

吹雪わらぶるポーランド
山楊の影痩すブルガリヤ
アイルランドの沼地より
聲をそろへて合圖せよ

今は希望の喇叭鳴る
革命の譜を歌はずや
血潮彩る赤旗を見て
誰れかは心臟の躍らざる

「失ふものは鐵鎖のみ
全世界をば所有べし」と
マルクス我れに敎へずや
萬國の勞働者一致せよ

上帝の宮殿を汚すなと
怒りて打ちしエスを見よ
地球は人類のエルサレム
滅亡を眺め忍ぶべき

潮は滿ちぬ、時は來ぬ
黑、白、黃の肌膚何ぞ
萬國の勞働者一致せよ
自由の森林に火を揚げて

THE CHOKUGEN.

(meaning 'speaking straight-forwardly.')
SOLE ORGAN OF JAPANESE SOCIALISTS.
Issued every Sunday.
Communications addressed to The Heiminsha, Yurakucho, Tokyo.
Vol. II.—No. 1. Tokyo, February 5th, 1905.

OUR ENGLISH COLUMN.

We here publish for the first time our English column because the Japanese socialists have lost other means of communication with the foreign comrades. There were three socialist papers in this country; namely, "The Socialist" proprieted by Mr Katayama, "The Heimin Shimbun" published at the Heiminsha, and this our paper. But "The Socialist," owing perhaps to Mr. Katayama's staying abroad and the persecution of the Government has changed its title. "The Heimin Shimbun" has just stopped its publication intentionally, knowing that it should be suppressed by the Government at the near future, as the trial at the Supreme Court shall be determined at the end of February. So our paper becomes now necessarily the sole organ of the Japanese socialists. Our paper, indeed, was the smallest of the three. But now we have enlarged its form and set up English Column, just like "The Heimin Shimbun." And all the members of the editorial staff of "The Heimin" have joined us to help in every matter. We hope that these foreign socialist papers which have thus far been kindly exchanging with "The Heimin" would remain in the same good terms by replacing it by the "Chokugen" in their exchange list.

EXISTENCE OF "THE HEIMINSHA."

"The Heimin Shimbun" has now ceased to exist. But "The Heiminsha" exists as before. "The Heiminsha" is now the sale office of our "Chokugen," and there many of our comrades are attending to their work. So it is requested that all communications from abroad should be addressed to "The Heiminsha."

A NEW SOCIALISTIC NOVEL.

The Heiminsha has just published a novel written by comrade Kinoshita. Kinoshita was very well known in this country as the speaker, as the journalist, as well as the solicitor. But it is of quite recently that he has come to fame as a novelist. He wrote a novel for the first time in the spring of last year. It was entitled "The Fire Pillar," and proved a great success. Now he has tried his second work whose title is "Confession of a Husband." The author intends to picture the evils of loveless marriage which is a quite common thing in this country as the effect of bourgeois family. He also depicted in it in a most sympathetic and vivid way the struggles between the miserable tenant farmers and the greedy land owners. Two thousand copies were sold instantly and a second edition is being prepared.

PETITION FOR WOMEN'S POLITICAL FREEDOM.

As reported in "The Heimin Shimbun" some of the most advanced ladies in Tokyo, including a number of socialists, recently issued a circular note inviting the support of the petition for the Diet, for the political freedom of women. The ladies have secured a large support, and have drawn up a petition requesting that Article 5 of the Peace Police Law be amended and the freedom to join political parties and participate in political meetings be granted to women. The petition was signed by over five hundred women of good position and presented to the House of Representatives on the 27th inst. by Messrs. Ebara and Shimada, members of the House. We believe that this petition will be taken up as the matter of course, and the reactionary law shall be duly abolished. This is indeed the first step toward the women's emancipation.

(電話本局三二六二番)　平民社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

◉内外時事

○露國革命の火

露國革命の火は其後猶頗る猛烈の觀を呈せり、左の諸報を見よ

△ガポン長老の檄　ガポン長老は軍隊及び諸種の結社に對し新らしき檄文を發し、血に汚されたる皇帝凡ての暴虐なる家族、其大臣、及び掠奪者（官吏を指す）に對し抗敵をなす爲め一致協力せんことを勸告せり、此の檄文は密かに分配せらるゝこと數千枚に及べり（倫敦電報）

△辯護士の決議　三百五十名の辯護士は一月二十三日の夕左の決議を爲せり即ち

（一）同盟罷業者と全然協同一致する事

（二）殺戮流血を流すに至らしめたる政府の行爲に對し抗議する事

（三）右に關し法廷に於て辯論を爲さゞる事

是より而して各同盟罷業者の爲め義捐金を募集する事に决せり（ロイテル電報）

△名士捕縛　自由主義を抱ける知名の教授、記者及び著作家は一月二十三日の夜捕縛せられたり（ロイテル電報）

△コサック兵と職工　一月二十四日午後コサック兵は職工等を驅逐するに際し數名に負傷せしめたり（同上）

△死傷多大　一月二十三日拂曉二三萬の職工は請願書を携へツアルスコヘ、セロ（露帝の離宮）に向ひコルピーを出發せしも途中軍隊の遮る所となり驅逐せられたり、當時の死傷數未詳なるも多大なり（同上）

△職工の鐵道攻擊　一月二十四日職工等は二回ツァルスコエ、セロへの鐵道を攻擊せしも驅退せられたり（同上）

△ゴルキーの拘留　有名なる社會主義の著述家マキシム、ゴルキーは拘留せられたり（同上）

此に於て露國政府は警視總監トレコフを彼得堡知事に任じ之に委ぬるに軍事行政の大權を以てし酷烈手段を以て鎭壓を行なはしむるに決せり、トレコフは就任早々廿五日の夜を以て革命の志士五千餘人を逮捕し、之をサイベリアに追放せり

辯護士一百人亦其内に在り

同時に露國政府は今回の同盟罷工を以て日英兩國の煽動に出づと爲し、危辯を弄せる掲示を爲して民心を惑はさんと力めたり、左の教務院回章の如き亦同一趣旨の者なり

△教務院の回章　露國教務院は回章を發し、皇帝及び皇帝の命令に服從すべきを勸告し、露の敵國より給料を受け居る騷擾者の爲めに迷はさるゝとなきを警告せり、同回章曰く、同盟罷工者は國の內外に於ける敵の爲めに煽動せられ、罪惡ある僧侶は國民皆な祖國保護の爲め協力せざるべからざる秋に於て運動を開始せり、而して敵の目的とする所は、露國々内に内亂を起し、滿州軍に援兵派遣を妨害するにありと、此回章は其の末文に於て、正教信仰者の同情に訴ふる旨を云へり

而して又一方には職工を懐柔するの手段を取り去三十日頃、露帝は終に勞働者の代表者を引見したりと報ぜらる

斯くて彼得堡に於ける騷擾は一時鎭靜に歸したるもの、如し、然れども左の如き

△擾亂一時鎭靜　露國の壓伏政略其効を奏し、首都彼得堡騷擾は鎭靜に歸したり、地方に於ける暴動及事は未だ全く治まらずと雖も革命的運動は一先頓挫の姿なり、尤も革命黨の首領は將來に於て更に一層大なる活動に出でんと計畫中なりと稱す

△大學教授の蹶起　彼得堡なる土木工學、機械工學、及び採礦學に關係ある大學教授より成れる諸學會は、各其所轄官者に對して、一月廿二日虐殺を攻擊し、彼等が今後大學に於ける教授の繼續を拒絕する由の決議書を提出せり（ロイテル電報）

諸報に依れば、火の手は猶其裏面に於て頗る熾なるものあるが如し、況んや地方に於ては更に猛烈なる革命の火の處々に爆發するを見たり

△波蘭の大騷亂　露領波蘭ワルソーに於ては十萬人の同盟罷工起り慘憺なる衝突ありたり、又たロッヅ地方に於ける同盟罷工は其數十種の多きに達せり（伯林電報）

△モスコー　にて二月廿七日印刷業職工は其要求を容れられたるを以て復業せしも其他の職工の同盟罷工は更に蔓延中なり

△キエフ　にては一月二十六日同盟罷工起りつゝあり

△ウラジミール縣下　エヴァノヴォナズネセンスケン（莫斯科の東北に當る）にては一月二十六日ミトウにては一月二十七日、何れも勞働者の騷擾發生せり

△ワルソー　に於ては一月二十七日同盟罷工蔓延しつゝあり、罷業者と軍隊との間に衝突を生じ若干の死傷あり（ロイテル電報）

△ワルソー市の暴動　去る土曜日ワルソー市に於て激烈なる暴動起り、立派なる商店は猛暴に遇ひ或は燒かれたり、當時騎兵は突貫し軍兵は諸所に發砲せり、英國領事及び副領事は別所に於て衛兵の攻擊を受け、副領事は面部に非常なる刀傷を受けたり（ロイテル電報）

△波蘭の大騷擾　ワルソー、の市中騷擾を極め全市猛烈なる暴民の手中に落つ、政府は戒嚴令を施行したり、リガに於ては數百の職工運動者は海中に擯され、其數十人は溺死したり（倫敦電報）

露國政府は斯くの如き窮狀の間に於て更に英佛兩國の攻擊を受けたり、英國政府は彼の日英兩國に關する告示とワルソーに於ける領事遭難とにつき、直ちに嚴重なる抗議を申込み流石の露國政府も此抗議に對しては一言の辯解もなく、直ちに其過を陳謝したり

△露國外相陳謝　露國外相ラムスドルフ伯は英國大使ハーデング氏に對し、ワルソーに於て英國領事に暴行を加へたる者を搜査審問すべきを、及びモスコー、リバウ、兩地に於ける夫の掲示を全部撤消したるを告知し、且つ右掲示に關するモスコー知事の行爲は絕對に之を非認する旨公言したり

佛國政府は今日と雖も猶露國の味方にして頻りに露佛同盟の有効を說き居れども佛國の平民（殊に社會黨）は之を喜ばず此時を機として盛んに露佛同盟廢棄の氣焰を高め居れり

△佛國社會黨の抗論　佛國首相ルーヴヰエー氏が議會に於て爲したる露佛同盟に關する演說は、社會黨議員ジョーレス其他の大喝采を以て迎へられたり彼等は露國の如き殺人者の政府と同盟を組織するに抗論す、此に於て外務相デルカッセ氏は數次立て調停を試み、佛國の利益及び名譽に顧みて願はくは忍從へよと請ひ、且つ露佛同盟が佛國に安全と信用とを與へたることを忘るべからずといへり、次で信任投票を行ひたるに政府方は百七に對する四百十の多數を得たり

△巴里の飛火　露國近時の事變に付否認の意を表する爲め、昨夕巴里に於て六千餘人の大集會あり、警視廳は之に對して非常の警戒を加へたり、集會の散ぜんとする時、爆裂彈を投ずる者ありて共和護衛兵二名負傷し、捕縛せられたる者數名あり、又露國公使館附武官イルベトミクグヴイ公邸宅の外側にも一個の爆裂彈發見せらる

吾人は無限の趣味を以て此活劇を觀見しながら、又暫く此に報道の筆を擱き、以て後電の到るを待つ

●大倉組靴工の紛擾

大倉組製靴工場は海軍御用を目當に昨年五月より開業したる者なるが、此程其取締と職工との間に紛擾起り、遂に警察の干涉によりて強硬なる一部の職工は其職を失ふに至れり

▲工場開始の當時に於ては未だ取締なるもの無く、職工一同も不便を感ずると多かりし爲め、其選任を主任者に請ひしに、主任者は早速に其職工中より宇津井、大久保の二名を選任せり、然るに其後取締は職工一同に對して甚だ暴虐を極め、開業當時は職工數八十人に餘りしが爾後不平を懷いて去る者多く、今日に至りては僅かに卅四五人に過ぎざるに至れり

▲斯る有樣なれば殘留せる職工にも不平を懷けるも[illegible]

鳴呼斯の如くにして勞働者の勇氣は挫かれつゝあるなり、斯の如くにして勞働者は奴隷の境に陷りつゝあるなり、而も斯の如き壓制が國家の警察機に依つて行はれ、其警察機の發動する原因が那邊に存するかを思ふて、吾人は慄然として怖れざるを得ざる也、

○旅順の露軍死傷數

露軍の統計に依れば旅順に於ける露軍の死傷は左の如くなりといふ

▲旅順露軍の兵數は最初三萬五千人なりしが[illegible]

[illegible]

鳴呼彼等何の爲めに驅られ、何の爲めに鬪ひ、何の爲めに斯く苦しめるや、露國の愛國者は歌ふて曰く『信仰の爲め、祖國の爲め、王の爲め』と、仰信や、祖國や、王や、彼等に取りて憎むべき仇敵のみ恐るべき惡魔のみ

○露國俘虜三萬に上る

一月三十一日現在の露國俘虜總數は三萬二百五十五名にして其中將校五百九十五名、下士卒二萬九千六百六十名收容所左の如し

收容所	將校	下士卒
松山	五二三	二、四四〇
大里	—	一、九六四
似島	—	二、七四七
名古屋	一二	一、〇一〇
大阪	—	一六、九六九
福知山	—	九〇一
姫路	—	九九九
福岡	—	二、〇九〇
靜岡	六〇	六〇〇
丸龜	—	三五〇
合計	五九五	二九、六六〇

而して彼等は日本出征軍人の家族よりも遙かに良好の待遇を受け居れるは奇也、

○活版工の勞働時間及賃銀

（警視廳の調査）に依れば現時府下に於ける活版職工人數、勞働時間及び賃銀左の如し（一時間賃銀調査）

社名	職工總數	勞働時間（平均）	賃銀（平均）	[illegible]	[illegible]
秀英舍	四二〇	一三	二〇錢	[illegible]	一七錢
同工場	六四九	一〇	一三	三九	一三
帝國印刷	一四四	一三	二八	三二	二二
築地活版	四九五	一三	一三	一九	一一
國光社	一六五	一〇	一九	四五	九
博運社	二六二	一一	一八	三三	六
開勞社	一〇七	一三	二一	二八	六
深川分社	三二一	一二	二四	三一	一一
都新聞社	九〇	九	二五	五二	一八
東愛堂	六五	九	二〇	四〇	一二
八尾活版	八五	一〇	二九	四	一九
愛善社	八二	一〇	三三	四	二三
三光社	五五	九	三五	五〇	三九
三省堂	七二	一〇	二七	四一	一七
熊田活版	九三	一〇	二九	四二	一九
印刷會社	五八	一一	二〇	二三	八
厚信舍	六〇	一一	二九	四〇	一六
三協舍	八〇	一〇	二四	三九	一四
朝日新聞	六八	一〇	二五	四九	一五
國民新聞	八六	九	二六	四四	一九
報文社	九七	一一	二九	四〇	一六
保卑社	五二	一二	二二	三六	一八

活版は進步の父母也、社會の智識を向上せしめ、文明を旺盛ならしむるの利器是に如く者なし、而して之に從事せる職工の境遇は斯く憐れむべきこと

○雜誌『社會主義』控訴棄却

雜誌『社會主義』署名人山根吾市氏に對する被告事件は第一審にて罰金四十圓を言渡され控訴中なりしが去廿五日東京控訴院に於て控訴を棄却せられたり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

平民新聞五十二號事件　上告趣意書

平民新聞五十二號被告事件が目下上告審に繋り居ることは讀者の既に知る所なるが、此程被告並に辯護人より左の二通の上告趣意書を大審院に呈出せり

▲上告趣意書

▲第一點 [illegible]

▲第二點 [illegible]

▲第三點 [illegible]

▲第四點 [illegible]

上告趣意書

右辯護人　花井卓藏　卜部喜太郎　今村力三郎

▲第一點　判決の理由に見るに被告等を以て「我國家 [illegible]

▲第二點 [illegible]

暗殺を企圖して萬民平等の大義を發揚したる明治時代に於て、斯かる斷定を國家機關の一部たる原院より聞かんことは [illegible]

▲第三點 [illegible]

▲第四點 [illegible]

[illegible] 日本國家の爲めに慚愧の念なき能はず

以上第一點乃至第四點の論旨 [illegible] 平民新聞所載の文章は未だ法の關與する能はざる限域外に立ちて評論の權利を行へるものにして、法律上の罪を爲さず、然るに原院は [illegible] 法律を適用したるは [illegible] 不法を冒せるものなり

右被告人　西川光二郎　幸德傳次郎

平民社より

枯川生

△此頃社に寢とまりして居るのは西川、神崎、松岡、及小生の四人、外に例のマァと云ふ小犬一疋 [illegible]

△石川君はツイ近頃 [illegible]

△ [illegible]

△ [illegible]（二月一日夜）

直言活動の時

原霞外

△平民新聞の終刊號は革命の血に彩られて出た [illegible]

△我が黨の機關紙平民新聞は一年二ヶ月の間に六十四號の奮戰をして [illegible]

△雜誌直言は生れてから [illegible]

△然るに [illegible]

△乃ち [illegible]

△ [illegible]

△或夜加藤氏に [illegible]

△ [illegible]

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●愛國心欠乏の原因

木下尚江

▲戰捷國の歎聲を聴け　戰捷の祝聲湧くが如き間に於て、吾人は青年學生に對する一個の判決を聞けり、曰く「彼等は戰爭に對して尤も冷淡なり」曰く「彼等は愛國の公心に尤も欠乏せり」と、吾人は國民新聞の如き御用紙上に於て、幾度も斯く論告宣言せらるゝを見て、先づ怪訝の念なきこと能はず、夫れ最近十數年間に於ける政府が教育の方針なるものは、一に愛國心の培養に在りしに非ずや、愛國心の教養の隆盛なること、今日の如きは、二千五百年の歴史に於て、未だ曾て見ざる所なり、何ぞ圖らん、今日に至て青年學生が愛國心欠乏の非難歎聲を聞くことあらんとは、論者曰く今日の青年は優柔なり無氣力なりと、若し當今の學生が愛國の熱情なく公心なく、優柔にして無氣力なること、果して御用記者の言の如しとせば、是れ青年學生の罪に非ずして、寧ろ教育其物の罪なり、青年公心の欠乏は、則ち十數年來政府が苦心せる教育の全然功果なかりしを自白する所以にして、當局先づ慚死せざるべからず、豈に其原因に向て忠實研究する所なくして可ならんや、

▲是れ教育の結果也　今日の青年が公心に缺乏すとの歎聲を聞きて、吾人は之を全然政府が教育施設の結果に歸することを憚らざる也、政府が教育の施設方法を見るに、其形式に於ては「愛國」を標榜すと雖も、其の實際は則ち努めて公共心の發動を制抑したるに非ずや、

△抑も藩閥政府が立憲政治の開幕に對して執れる準備を見るに、民主々義及び政黨を壓倒して以て國民をして政府權を尊重するの氣風を旺ならしめんことに盡せしたりし也、故に當時の政府が命令する愛國心なるものは政府全權の專制時代に適合する所のものにして、決して立憲政治時代を目的とせる進歩的愛國心に非る也、現に帝國大學を以て官吏養成所となし、凡て學生を率ゆるに軍隊的方針を以てし、上官長者の命令に服從ふを以て温良の模型となせり、學生が社會の事物に着目し、自主獨立の意識見を發成するが如きは、決して政府の喜ぶ所に非ざりしなり、

△一言以て之を掩へば、愛國の名義に於てする命令に默從せよ、服從せよ、學生の職務足るとするもの、是れ政府の本旨なりき、

△故に前年渡良瀬沿岸鑛毒地の情狀を聞きて、都下の學生大擧して之を視察し、其の慘狀に憤慨して救濟の必要を唱ふるや、政府は直に各學校に命令して、學生が社會的方面に注意するの不都合なるを緊諭せり、

△帝國大學生の間に鑛毒地視察の企劃成り、大學總長も之を默許して、將に出發せんとするの前夜、文部大臣は大學總長を招きて、強いて大學生の鑛毒地視察を禁止せり

斯の如く積年、公心發動の壓抑を以て學生を訓練せるもの、即ち今日に至て明々に其効果を顯現したるなり、

▲國家を理解せしめず　今日の青年が愛國の熱情に乏しくて言ふ所以のものは、必竟「國家」を鵜呑みにすることをのみ命令して、之を咀嚼することを教育せざりしに基く、

△所謂科學の尊貴なる所以は、一切の事物現象に對する組織的智識を與ふるに在り、故に科學教育の時代に於ける學生の本分は疑問と討究と理解とに在るもの也、故に事體の最も重大なるものに就ては、忌憚なき疑問と、自由なる討究を盛ならしめざるべからず、若し「懷疑」を恐怖するならば、始めより斷然科學的教育を施さゞるに如かず、

△疑惑を避けて科學を奨勵したるに困ち明治政府が教育の方針なりしに非ずや、是れ尤も哀むべき所なり、既に科學を奨勵す、科學の範圍を制限するが如きは、是れ政權の決して爲すまじき所にして、且つ爲し能はざる所也、

△「人生の懷疑」が今日青年の頭腦を支配するを強大なるを見て、政府者及び御用記者等は、之を時代の悪潮となし、更に之を貶して優柔無氣力と罵倒す、然れ共「人生の懷疑」は科學隆盛の必然結果にして、且つ將來、偉大なる確信は此懷疑の窩中より生誕すべき也、之を悪潮と罵るが如きは、常に國民を驅つて目前我手足と爲すことをのみ思慮する政略家の野望か、然らずんば偽的獨斷家の僻見のみ、

△然るに從來政府が一般學校をして愛國教育を行はしむる實況を察するに、其の目的物たる「國家」の何物たるかを會得せしむるの道を取らざりし也、「國家」に對する自由討究を聽ざりし也、即ち他の議論にして「神道的感情」に觸るゝ時は直に之を指して「日本の國體を毀くる」の議論となし、其人を呼ぶに「國賊」を以てせり、故に久米邦武氏は古代史論の爲めに大學講座を失ひ、耶蘇教は國體に相容れずとの妄斷を以て學生に禁止せり、是れ政略を以て科學を制限せんとするの愚策に非ざりし乎、

然れ共理解せずんば満足せざるは、當今學生が智識欲の要求なり、之を求めて得ずんば、彼等は只だ懷疑の霧中に迷はざるべからず、若し今日の學生が戰爭てふ國家的活動の間に立ちながら、其の青年の血、容易に沸騰せざること、眞に御用記者の焦慮するが如くんば、是れ彼等青年が「國家」の興味を有せざるが爲めにして、而して其の興味を感ぜざるは、則ち理解の自由を拘束せる政府が方針の失敗に外ならず、責任一に政府に在り、又た誰をか咎めんや、

▲救濟法は「思想の自由」　故に「青年の愛國心欠乏」てふ御用記者の攻擊は、即ち直に政府に對する大彈劾なり、思ふに政府も既往の過誤を覺悟したるならん、吾人は熱心に忠告す、速に教育社會より思想束縛の鎖鎖を解除せよ、吾人は今日の教育社會に於て、殆ど全然討究の自由を見ること能はざるを悲む、

●八百屋お七の墓に立ちて

孤劍

若き鍛冶が振り上ぐる
鐵槌ゆ火花の飛ぶがごと
紅梅も吹き散り黄昏の
涙にしめる鐘よ
春もさびしき吉祥寺
君が墳墓こゝにありや
珊瑚をのべし軟肌の
炎の中に焚かれすば
舌はわざみに眼は石の
情氷りてさむき世ぞ
「宮」の王者がかぶら矢に
愛の車の破れしより
林檎に似たる男子が
胸を毒蛇に捲かれては
小百合の如き乙女子も
權力の岩に壓さるゝよ
あゝ君遂に踏らざれ
光明まばゆき額わげて
永久にたのしく天堂に
愛の火盞を抱きつゝ

●性論と社會主義

「宗教上倫理上に於ける社會主義と個人主義の根本的分派點」

石川生

一、緒言

▲社會主義と個人主義との衝突は歴史上に於て初まつたのであるが、現今我國に於て社會主義に對する多くの反對は宗教上倫理上の論である、予は今ま此に對して少しく根本的の辨明を試みたいと思ふ

▲社會主義者は常に罪惡を以て社會が造るものであると云ふが、個人主義者は之に反して罪惡は社會が造るのでは無くて個人が造るのだと云ふ、換言すれば、社會主義者は社會を改革すれば多くの罪惡は消滅するものとなし、個人主義者は個人を改革せねば罪惡は決して消滅せぬといふのである

▲是に於て彼の性論に立ち入つて根本的解決をせねばならぬこととなる、即ち人の天性は善であるか、惡であるか、或は善惡合せ有するか、或は又善にも惡にも非ざるかといふことを究めねばならぬ、若し天性が善ならば罪惡は即ち外方より造られたもので、人の周圍(即ち社會)を改革すれば罪は消滅する、若し天性が惡なれば人の周圍を改革するも益に無く、個人其ものを改めねばならぬこととなる、故に性論上の決定如何により或は社會主義が眞理となり、或は個人主義が眞理となるのである

二、性論

▲處が斯の「性」の議論は古い々々時代に行はれたとて今日では學說が一定して其を疑ふ者は無いのだ、タダ〳〵したれど此議論は西洋にもあつたのだが、併し東洋程古く且つ八ヶましくは無かつた、誰でも知て居る通り、支那の孟子時代に於て此議論が激甚であつた、有名な孟子の性善說に反對して荀卿の性惡論出で、而して楊雄は又た此兩者に反して善惡混淆說を唱へて居る

▲遙かに下つて宋の時代となり、蘇東坡の楊雄論が出た、蘇東坡は以上三者の議論を斥けて「唯天下之所ニ同安一者、聖人指以爲レ善」といふて居る、荀子の様に人の性が惡ならば聖人は何を標準として道義を定めることが出來やうか、楊雄の様に性に善と惡が混じて居るとするも又た所謂「善」てふ事を定むるの標準が分らぬ、東坡が「天下之所同安者」を聖人が善と稱すといふたのは議論が機械的なる觀はあれど、先づ眞理に叶ふたらう、而して中庸に「性に率ふ之を道と言ふ」とあるは能く論理的に說いたものと思ふ、即ち孟子の様に性が善だといはずに、性に率ふて道德が出來、人の性の完全なる實現擴充を爲すのが善であると云ふ方が論理的である

▲次に西洋の學說にも、少し形は違ふが、人の天性如何に就て議論があつた、例へば十七世紀に於て一方にホッブスが利己主義說を主張して、人の天性は利己的にして其利己心を滿足せん爲に相爭ふことを常とする者だと言ひ、其れに對してモールだとかシャフツベリーだかいふ人達は人は性にながら良心を持ち、善惡を直覺するものだといふて居る

▲斯くの如くに西洋にも東洋にも人の天性に就ては隨分議論も八ヶ間敷かつたが、今日では一般の學者が、人の性其ものが善でも惡でも無けれど、其性を圓滿に擴充し實理する道が即ち善であるといふことに一致して居るのは誰でも承知のことである

三、學者宗教家の個人主義

▲性論に就ての世界の學說は以上の如く今日では一致して居る、然るに怪しむべきは世の學者の宗教家の態度である、彼等は常に曰ふ「社會に如何に改革せらるゝも個人の精神を改めざれば罪惡は決して世に絶滅せず」と、此は一應尤もに聞ゆる議論であつて世人が多く迷はさるゝのであるが、深く考へれば實に大なる愚論である

▲一寸と考へても分る、世の所謂罪惡の多くは大抵は社會道德の破壞であつて、個人と個人との間、個人と社會との間に起る衝突では無いか、故に若し此衝突が社會組織の改革に依て消滅したなら、從て社會道德上の罪惡は全く消滅する譯である、此社會道德上の罪惡の外に個人道德上の罪惡がある、例へば食過ぎて身體を損傷する如きこれである、之れは社會が改革されても直ちに消滅するものではあるまいが、併し智識が漸々に發達し、人を滿足することが自由になり、體の生理組織が完全になりて此個人的罪惡の消滅するに至るも、亦た社會改革の一結果として何れ實現さるべきものと思ふ

▲若し世の學者宗教家の様に罪は人の内心にあるもの故如何に外界を改革するも消滅するもので無いとするなら、勢ひ厭世主義に陷りて寂滅爲樂を稱ふより外に道が無くなる、蓋し「我」といふものを全然無くせねば罪は消滅せぬからである、佛教の厭世主義も此路から來るのであらう

四、罪惡は内より起らず、外より來る

▲社會主義者の考へでは、罪は内より起るもので無くて外から來るのである、心の奥底より起る處のものは總て是れ眞にして美にして且つ善であるのだが、外より來る勢力が其活動を妨げて惡結果を生ぜしむるのであつて、若し天地間の總ての物件が天地の所有であつて個人の所有で無くなれば、何人が何處で何んなものを食はうが取らうが、それが何んで罪にならう、それを自己のもの、他人のものと區別する故に盜みの詐欺のといふ罪も起るのである、されば其罪の由て來る外部の境遇を改めれば罪惡は消滅するのである

▲社會主義者は中庸の「性に率ふ之を道と謂ふ」てふ說を採る、人の天然性を圓滿に擴充し實現するのが人の目的であると言ふのだ、個人主義の道德家宗教家の如く此天然性に抑壓を加へるを以て善なりとなすは、社會主義者の採らざる所である、社會主義者は此天然性の擴充を妨ぐるものは外面なる境遇にありとして社會の改革を主張するのである

▲故に個人主義の敵は個人其ものであるけれど、社會主義の敵は社會の惡組織である、個人主義の理論は其根本の誤謬より起りて絶望に終り、人に死に至らざれば罪を脱する能はずとなし厭世に陷るも、社會主義の方は人は本來善なるもの故其本性を圓滿に發達し得る様な自由の社會を造るなら人は幸福になると言ふのである、故に社會主義は樂天主義である、消極主義に非ずして積極主義である

五、結論

▲以上論ずるが如く、若し中庸の「性に率ふ之を道と謂ふ」てふ說を信ずるなら、何人も必然社會主義に來ればならんのである、然るに世の學者宗教家等が一方には此說を唱導しながら、他方に於て社會主義を攻撃するのは、曲學阿世か然らずんば頑迷不靈の叛論と言はなければなりません

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●學者と社會主義

ボストン市に於て　金子喜一

世に社會主義を以て、勞働者の專有物の如くに見做し、而して學者はこれと遠かるを以て、正當なるか如く考ふる者あるも、これ誤れる謬見と日はざるべからず。社會主義は、決して勞働者のみの注意を價する現象にあらざる也。所謂經濟學者なる者は、多くは單に世上の活問題に不注意にして、而も自ら得意然たるに至りては、吾人も亦之を怪とし驚かざるを得ず。

△今日歐米にありて、所謂學者なる者が如何に熱心なる社會主義研究者であるかを知らば、吾國の學者は正に自ら之を恥て死すべき也。吾人は名高き帝國大學の歷史教授にして、社會主義の歷史的研究をなしとげたる者あるを聞かず、而して又哲學者が、倫理を論じて、何等の經濟學を以て其論を立てし何等の組織的著書を有する者なきを見るに至り、吾人は曾に日本の哲學者及神學界の如何に真理に不忠實にして、彼等はパンを得るためにのみ、時間を業とせるを悲しまずむばあらざる也。

△英國に當代の最も明晰なる頭腦と稱せらるゝシドニー、ウエッブ氏は曾て曰く『今日に於て社會主義の何たるをいまだ知らざる者は、取りもなほさず、智識的退步を表白する者也』と。吾人は此言が、吾が日本に最も適應せらるべきを信ずる者也。

△試みに日本の學者が社會主義に對する態度を見られよ。彼等の多くは未だ之を研究せず、何等の意見だも發表せざる也。たまたま之を發表する者あれば、極めて淺薄にしてブリタニカ位をオーソリティとせる者に過ぎず。吾人は敢て彼等の胸中にたち入りて、其心理を解剖せんとはせざるべし、其の餘りに真理に冷淡にして、時代の問題に迂なるを責めざらんと欲するも得ず。

△殊に經濟學を講ずるの學者にして、此問題に一片の注意だも拂はざるは、抑も何等の態度ぞ。歐米にありて今日著はさるゝ經濟學書にして、社會主義に注意を拂はざるは殆ど稀なり、否な今日最新なる經濟學者は、多くは彼等自ら社會主義家也。

△英國經濟の先驅たりしミルですらも、其自傳に於て、自分等夫妻は一般社會主義者と稱せらるゝを甘ずる者なりと、自白せしにあらずや。又英國現今第一流の經濟家として信用せらるゝ、マーシャルは其『經濟學原理』に於て、近世經濟の一進化は、實に社會主義者の感化に歸せざるべからずと許容せしを見ずや。

△唯だにミル、マーシャル兩氏に止まらざる也。英國に於てブリタニカに社會主義者を書きしカーカップなり、八時間勞働一問題の著者として有名なる、レー氏なり、資本制度の進化、新社會問題一の著者ジョン、ホブソン氏の如き、トレード、ユニオニズム史の著者たるウエッブ氏夫妻の如き、ケムブリッヂ大學教授たりしシヂウイック氏の如き、又哲學者としてグラスゴウ大學教授として知られたるケヤードの如きは、何れも熱心なる社會主義者若しくは研究者にてある也。

△米國にありても、故ウォーカーの如き、ジョーヂの如き、今のアダムスの如き、パーソンスの如き、イリーの如き、セリグマンの如き、クラークの如き、何れも熱心なる社會主義研究者にあらずとせんや、獨乙にありては所謂講壇社會主義者の代表者シユモーレルを初めとして、シヨンベルグ。ヒルデブランド。ブレンターノー等の如き、又社會主義論一を著して、世人をして彼は社會主義者にあらずやとまで思はしめたる、ヲーストリアの大藏大臣たりしシヤフレー博士の如きもあるにあらずや。

△その他佛國にありてはレロイ、ボーリユー兄弟の如き、ウルバン、ゴイエの如き、ヂッドの如きチャンネの如き、伊太利に於けるロリヤの如き、過般死去せるローム大學教授たりし社會主義學者ラブリヲラの如き、又犯罪學者として有名なるロムブロゾ及其令孃の如き、共に甚だ熱心なる社會主義運動家にてありと知らずや、かくの如く數へ來れば、なほ天文學者として、又は地質學者として、詩人として、殆ど屈指に暇あらざる也。

△彼等は或は自身の專門として、研究せるもあるべし、或は自個の專門以外、人生問題、人道問題として、研究せるものあらむ、而も等しく真理のため、自らその代辯者となり、若しくは説明者となり將た又攻擊家となりし也、吾人は其の何れの者たるを問はず、彼等の熱心にして而も忠實なる研究心を尊敬せずんばあらず。

△然るに吾國に於て、かの所謂經濟學者にして能く社會主義を、忠實に、公平に研究したる者幾人ありや、或は隠れて研究せる者あらむ、吾人は不幸にしてこれらを聞かざりし也、吾人の知れる限りに於て指摘すれば、わづかに先づ法科大學の一教授とゾムバートを譯したる一法學士と、國家社會主義を主張せる一博士と一學士ありしのみ、而も彼等や、常に沈默勝ちにして、いまだ目醒しき著述若しくは行動ありしを聞かず。

△平民的學者にして好むで經濟學を論ずる田口卯吉氏は今何處にありや、早稲田の經濟才子として、經濟新報の紙上、時に預言をなし賜ふ天野博士は今何處にありや、吾人は當今第一流の雜誌を以て誇りつゝある雜誌『太陽』の所謂特別寄書家たる學者先生より、社會主義に關する論文ありしとをいまだ嘗て知らざる也。

△吾人は最後に一言し置くべし、如何に學者は沈默を守りても、如何に資本家は壓迫を試みても、人間の精神にしみ渡りて、今や正に世界を覆はむとする此の大思潮は、遂に覆ひかくすこと能はざる也、彼等は却りて自らの時代をくれを悔ひざるべからざるの時に近づかんとしつゝあり、彼等は憐むべくも此の潮に洗ひ去らるべき運命に近よりつゝある也、日本の學者諸君、予はウエッブ氏と共に繰りかへして曰ふ、今日に於て社會主義の何者たるかを知らざるは取りもなほさず、自らの智識的退步を表白する者也と。

▲幸德君足下

親愛なる同志よ

十二月十一日までの平民新聞が着いたので、大きに悦んだ、僕は發行禁止になつたと思つたので、日本人が追々に讀んであるを、全世界の同志に知らせて遣らうと思つて、先日獨乙の平民新聞や佛蘭西へ送つて置いたのだ

[illegible]

一月二日　米國にて　A. Johnson.

●暗潮

（[illegible]香）

現世は正しくはあらず權力ある
　痴者はびこれば弱き子起たぬ

を叫びの波まとき世の[illegible]
　弱きを阻ふ法律なりとか

銃すてゝ人道の叫び[illegible]
　火は投げられぬ[illegible]いうち

世の光り[illegible]
　人は受けし[illegible]

紳士閥が惡魔を友と[illegible]
　夜毎日毎に門[illegible]

紳士閥が努めずゆたに迷る世に
　吾子血につとの飢にすら戰ふ

大義なく捉ら立たで呼ばれし
　弱き子叫ぶ渡良瀬の川

渡良瀬の渡るよすがも何しかも
　人は魔神して窮きは避る

●田中正造翁

叫び擧げて茲に二十年經ぬ成らず
　叫びは[illegible]れし翁わ[illegible]れむ

君を措きて誰にかへりみる渡良瀬ぞ
　二十年試[illegible]魔に呪はれし

●折にふれて　F

野に立ちて默想に耽るわが物を
　迷ひの落葉のそとかすめ去り

ゆかしさは香のみかは雪の中に
　雄々しく笑ます白梅の花

荒れ〳〵す野邊を深雪に飾らせて
　笑ゆるもうれし白梅の花

一枝は折りて賜さんましら菊
　今朝初霜の置けるながらを

初霜に嵐吹き添ふこの夕
　思ふは野路の白菊の床

來ん年を綴る香にこそ契りまし
　色あせ果てし野路のむら菊

我妹のとき髮姿いぢらしや
　白梅かざす手に春立ちぬ

花と散れなせめて消きを戀ふる子が
　生命の榮をちかふ天地

湧きかへる血は冷ゆるとも戀の手に
　戀はすやすめや人の子の世ぞ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

●大家先生の戰後經營

山田濁海

序言、早稲田大學が紀念の爲めにとて近頃出版したる『戰後經營』は、當世諸大家先生廿有餘人の戰後に關する書策を集錄したるものにして、其趣味の多樣なる、宛然五百羅漢を見るの感あり。予が學と識とは、素より是等諸公の萬分の一にだも及ばざるものなれど、一寸の虫にも五分の魂とかや、今そが二三に就て、讀者諸君と共に茲に聊かの研究を試みむと欲す。

(一)海軍少將肝付兼行氏　氏の所謂海事眼に映ぜし戰後經營とは大要次の如し、

世の進運に察し我國情に顧み、戰後經營の要を軍備にありとし、軍備の要を海資にありとし、海資の要を海洋交通機關の完備にありとし、而して其要を文明的施設にありとし、終に文明的港の設備を以て戰後經營の根蒂なりと認し、我海國民が天賦無窮の幸運を莊嚴にし永く各自の幸福を享受する所以の道は、既に七福神的品性を具備して實船を操縦するにありと云々と、

然り、誠に軍備の擴張は事實として現はれん、而して三井三菱何々、之等七福神の福利は遺憾なく保護せられん、然れども惜むべし、大多數平民の福利如何は遂に少將が海事眼に映ぜざりき、吁慶哉。

(二)文學博士村上專精氏。宗教家としての戰後經營と題し、

戰後の經營は宗教家としても亦責任ありとて、戰爭の可否を論じ、平民新聞社同人等の非戰論は、宗教の一面のみを見て國家を見ず、大活眼を開きて宗教を見よと叫び、もしかく偏僻なる眼より見ば、獨り宗教の上よりのみならず、政治上よりも、經濟よりし、教育上よりも、人道の上より見るも、戰爭はど忌むべきものなく、平和は世界の寶にして、戰爭は世界の惡魔なりとて更に數字的に、日露戰爭に於て失はれたる人命と財寶とを算し、且つ曰く、戰爭は經濟上よりの要求にもあらず、生產上よりの要求にもあらず、教育上よりの要求にもあらず、個人としての要求にもあらず、戰爭を要求するものは只國家なりと斷定し、更に、戰爭は人の奮發心と、勇氣とを喚起し、又我國をして世界の舞臺に立ちて、强國たるの地位を保たしむるの利ありと說けり。

夫れ然り、然れども吾人は更に博士に向つて所謂奮發と勇氣と强國との概念に就て、一層の說明を乞はんと欲するものなり、而して斯の如きは誠に宗教の責任なりや否やを、博士は更に進んで戰後に於ける宗教家の大責任なりとて

朝鮮と滿洲とに布敎して彼地の人心を化し、自然の間に日本宗敎的精神を惹起せしむべしと、

借問す、佛敎の守本尊は大日本帝國なりや否や。

(三)法學博士天野爲之氏。早稲田大學の重鎭として、三井銀行の顧問として、東洋經濟新報の主幹として、其名を知られたる英國派の經濟學者天野爲之氏は、戰後に於ける經濟政策を論じて、極めて大膽なる告白をなせり、之れ恐らくば官學者一流の敢てなし能はざる所なり、即ち

實業教育を普及せしめて、實業界の猛將勇卒を得るの獨逸の經濟的發展は之なり、かの偏狹なる忠君愛國熱に感染して、實業教育を疎かにするが如きは、教育家の戒めざるべからざる所たりと說き、長森案を駁して保護政策の曖昧とし、泥坊にも三分の利あり、況んや堂々たる日本政府が黑幕となり、日本一の紳士が施す所多少の理なからんやと嘲罵したり。

然れども思へ、博士の所謂實業界の猛將勇卒とは、何を意味するか、少なくとも、變體保護政策の黑幕たり、日本政府が認めて猛將となす所のものは長森某なるにあらずや、然り自由競爭の時代に於ける經濟的猛將は常に大資本家にあらずんば則ち大投機者流なり、三分の理を理として、七分の惡を犯すの者流のみ、實業教育が齎らす弊害も亦大いならずや、

(四)浮田和民氏。氏は戰後の社會政策を論じて

戰爭に勝つは勞働者の力なりとて勞働保護を叫び、ビスマルクの國家社會主義を賛し、社會黨の勢力は、其主張の積極的眞理なるよりは、寧ろ消極的に社會の弊事を指摘して其急處を突くにありとし、而も尙社會主義の積極的主張たる土地資本の公有は可能事なりと說けり、

思はざりき、聰明君の如くにして猶且此矛盾あらんとは、更に又、

社會主義の綱領は國家自ら進んで之を實行するにありとし、社會の貴族即ち紳士族平民の別を問はず、社會の平均以上にあるものは、自ら其本分を自覺して、彼の英國に於て地主が土地條令に反對せしが如き事なかるべしと戒め、更に朝鮮は自國同樣に思ふて之を大切にせよとて、アンな事を云ひ、日本は東洋の師範學校なり、自由平等を尊み、內に忠良の被治者となり、出でゝは直らに人の治者たるの能力を養ふは、今後社會政策の理想とすべき所なりと論を結べり、

今の政治家や資本家が悉く浮田先生の御注文通りの君子人になり得るものとせば先生の論も亦一理ありと云ふべし。然れども先生は如何にして左樣なる魔術を施し玉はんとするにや。

(五)法學博士戸水寛人氏。名にし負ふ大學七博士の隨一人たるだけに、滿洲處分論は君が戰後の唯一經營たるもの、如し其要に曰く、

一、日本は滿洲を淸國に還付すべし、二、滿洲を世界に開放すべし、三、東淸鐵道を日本に讓與せしむべし、四、東淸鐵道は我軍隊をして之を守備せしむべし、五、旅順、ダルニーの租借地を日本に讓與せしむべし

吾人は是に就て多くを謂はじ、日露事構ふるの始めに當りてや、旅に開戰を主張して、一度はバイカル湖以東を我有にせよと叫びし博士、今や以上の條件を以て滿足すべきを說く、何故に連勝の勢ひに乘じて、露の同盟罷工と結び、直ちに前んで聖都を襲ふの策を獻せざるや、噫遂に當年の意氣寛ふべからず。

(六)久米邦武氏。日本人は侵略の語を解するかと題して、何事かを論ぜり、

日本には古往今來侵略の歷史なく、日本民族は極めて無邪氣なる民なりと云ひ、臺灣は古領にして、侵略にあらず、樺太は故擄なり、神功皇の三韓征伐も侵略にあらず彼地は神代より我領なりきと說けり

敢て問ふ、豐太閤が朝鮮を征せしに非ずして、淸正が虎を狩りしには非らざるか呵々。

(七)法學博士鳩山和夫氏、戰後の政治と題して曰く、

古來大戰爭の後に於ては常に一個の英雄を生じて、社會の名望を一身に集め、戰後の政治は獨り其方寸に定まり、或は立憲政治を打破し、若しくは少なくとも、其進步發達を害せり、されど今我國情に察するに、無能なる現內閣と軍人との間に於て、此種の人なきは賀すべし、かくてよく多數平民を代表せる多數政治は行はれ、以て立憲の美を濟すを得ん云々

吾人は現今政黨者流が、憲政美を云爲するを見て、寧ろ噴飯に耐へざるものあり、多數平民の意志今や何れの處に代表さるるものぞ、想ふに鳩山君の意は、幸ひにも現內閣と軍人との間に左までの大人物なきが故に、我政黨閥の輩も亦聊か戰後政權に指を染むるを得べしと云ふに在らん乎以上大家先生の戰後經營なるものを一瞥するに、大概かくの如し、多幸なるものは平民なるかな。

●社會主義運動基金募集

我々は是まで平民新聞を機關とし、平民社を中心として、社會主義の傳道に從事して居りました、そして其平民社は常に四方硝子張の如くにして、社中の事務も經濟も、生活も、一切同志諸君の前に公表して、諸君の同情と助力とに依賴して今日まで此中心を維持して來ました然るに、今や我々の運動は、種々なる壓迫と妨害とを受けて、到底從來の形態を保つ事が出來なくなりました、四方硝子張と云ふ譯にも行かなくなりました、一切の經營劃策を暗中に行はねばならぬ事になりました、而して同志諸君の同情と助力とに依賴すること、更に多大ならざるを得ざる次第であります

我々は兎にかく『運動基金』の必要を感じます、壓迫を受くれば受くるだけ用心金の必要を感じます、我々は現に『運動基金』として千餘圓を有して居ります、然しながら我々は數百圓の罰金と數百圓の損害金(印刷器械沒收の爲)とを負擔すべき運命に迫つて居ります、而して又現に種々言ひがたき費用を要し、又將來如何に測りがたき費用を要するかも知れませぬ、故に我々は敢て茲に諸君に訴へて、卒直に其供給を求むるのであります

石川三四郎　西川光次郎　小島龍太郎
加藤時次郎　幸德傳次郎　堺　利彥
佐治　實然　齋藤兼治郎　木下　尙江

▲『運動基金』の受付、保管及び支出は暫く平民社內堺利彥に於て其任に當る事と致します

●今日の會合

△社會主義婦人講演　本日午後一時半より平民社樓上に開く、會費金五錢、男子たる御同伴あるも差支なし、豫定の講談左の如し、

△節操に對する今日の迷信及疑問……木下尙江
△天地と人間……松岡文子
△題未定……今井歌子

●社會主義運動基金寄附廣告

▲金三十錢	青山原宿	加藤貫吉氏
▲金十錢		霧の下なる雜草
▲金二圓	日本橋	無名氏
▲金五十錢(第二回)	四谷	伊藤長三氏
▲金五十錢	臺北	加藤巾衣氏
▲金一圓	宇都宮	猪熊氏
▲金卅二錢五厘(第二回)	芝	丸山つれ氏
▲金一圓廿五錢	茨城	沼崎重平氏
▲金一圓(第五回、第六回)	北海道	林隆治氏
▲金二圓(第二回)	北見	廣澤惣吉氏
▲金三十錢(第一回)	神奈川	櫻井仁八氏
▲金五十錢	神田區	長谷川太郎氏
▲金五十錢(第二回)	京橋區	須藤錄次郎氏
▲金二十錢		無名氏
▲金十二錢		無名氏
▲金一圓(第二回)	橫須賀	淺見市太郎氏
▲金三圓		大賀長一氏
▲金五十錢		無名氏
▲金一圓	日本橋	無名氏
▲金一圓	福島縣	佐久間森一氏
▲金二圓	越後	如空生氏
▲金一圓	青森	須藤寧文氏
▲金五十錢	千葉	香浦氏
▲金三十錢(第一回)	越後	丸山利吉氏
▲金五十錢	岐阜	永井市太郎氏
▲金一圓四十錢	上海	磯田哲平氏
▲金一圓	神田	武居俊十郎氏
▲金五十錢	日本橋	山下常吉氏
▲金二十錢	神田	鹽原七郎氏
▲金十二錢	敦賀	江崎鎗氏
▲金三十五錢	土佐	柿內豊吉氏
▲金三十錢	埼玉	曙月氏、天外、三悟氏
▲金二十錢(第二回)	小石川	加藤氏
▲金二十錢(第二回)	餌差町	無名氏
▲金十錢(第一回)		新海元氏
▲金壹圓	紀州田邊	毛利柴庵氏
▲金五十錢	同	豊田孤寒氏
▲金五十錢	同	石濱棗洲氏
▲金二十錢	同	吉村郡吉氏
▲金五錢	同	榎本貝吉氏
▲金三十錢	同	加藤紫海氏
▲金一圓	同	山中定吉氏
▲金二圓	同	岡本庄太郎氏
▲金二十錢	同	野村第一風氏
▲金五十錢	同	奥野健太郎氏
▲金五十錢	同	小切間橋右衛門氏
▲金二十錢	同	某氏
▲金二十錢	同	池田靜氏
▲金一圓五十錢	同	近藤新十郎氏
▲金五十錢	同	岡本與三郎氏
▲金十錢	同	笠松昱三氏
▲金十五錢	同	室井源吉氏
▲金二十錢	同	石濱安吉氏
▲金三十錢	同	戸田三綱氏
▲金二十錢	同	富幸吳服店
▲金十七錢	名古屋	誠進堂氏
▲金一圓五十六錢五厘(第三回)		香浦氏
▲金五十錢(第七回)	越後	武藤於菟氏
▲金十錢(第一回)	同	川島繁氏
▲金十錢(第一回)	同	某氏

小計　金參拾八圓參拾錢也
合計　金一千〇〇一圓七拾六錢也(以上二月二日迄)

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

本紙擴張に就ての注意

▲▲「直言」の發展　本紙は本號より紙幅を擴大し、發行回數を増加し、第二卷第一號として新に世に見ゆる事となりました、然しながら其發展の要は決して其形に在るのではありませぬ、要は只日本社會主義の中央機關たるの點に在るのであります

▲▲本紙の記者　として從來の[illegible]外、山田滋海、白柳秀湖、小野有香、加藤時次郎、等の外、平民社の同人たる幸徳秋水、石川旭山、堺枯川、西川光次郎、木下尚江、松岡文子、小田頼造、山口義三等の諸氏も、亦皆來り援くるの約があります

▲▲本紙の賣捌　本紙の發行所は直行社と稱し、府下豊多摩郡大久保村に設置してありますが、賣捌の事は一切平民社に依托致しましたゆゑ、御注文は凡て平民社の方へ御申込を願ひます、又直行社と平民社と熟議の上、平民新聞の前金御拂込の方は、直ちに「直言」の前金御拂込のものと見做し、[illegible]に致します、[illegible]讀者諸君に於ても[illegible]、[illegible]何卒寛大に御承諾を願ひます、尤もこれに不都合の御方あらば、それは必ず平民社より前金を御返し申す事と致します

▲▲▲▲▲直行社賣捌諸君　に對して特に申上げて置かねばならぬ事があります、是迄で本紙の代價は在京賣捌には[illegible]、地方賣捌には[illegible]を請求して居りましたが、今回發行回數増加に就ては、在京と地方とを問はず、總て新定價に依りて請求致します、此段惡しからず御承諾の上、新定價に依り前金御拂込を願ひます

▲猶一切の通信交涉は便宜上、平民社の方へ願ひます、さすれば平民社より直ちに直行社へ[illegible]ある者もありますゆゑ、依て本紙第一頁に平民社の電話番號を記して置きます

同志の運動

●傳道行商の記（下の關より）

小田生　山口生

▲一月二十二日　午前に防府町に着いて行商を[illegible]、夕方[illegible]島村に着いて同志福永幸右衛門君を訪ひ、[illegible]といふ宿屋に泊つた、夜福永君は[illegible]岡文龍氏と二人で我等を訪問せられた、[illegible]岡氏は紀州の同志で[illegible]君と共に高野山の大平林に居つた人で、福永君と共に質朴なる青年農夫で、共に社會主義の信者である、

▲二十三日　朝のうちに[illegible]浦に行商に赴き、[illegible]今日は[illegible]、此日は[illegible]、[illegible]

▲二十四日　[illegible]

▲二十五日　[illegible]

▲二十六日　[illegible]

▲此行日を費す[illegible]十四日、[illegible]百里に渡る長程を[illegible]、[illegible]

▲[illegible]

▲[illegible]

▲社會主義研究會（平民社）

去廿九日午後六時半より例の通り平民社樓上に開會せり、當夜の演題は「性慾論」てふ奇抜なものであつたのと平民新聞の葬式日だといふので、出會者は非常に多く、室内にギツシリ詰り、已を得ず梯子段から首を出して聽いて居た人もあつた、[illegible]枯川生は[illegible]、石川生代つて「性慾論（社會主義）」てふ講話を爲し、[illegible]平民新聞[illegible]、[illegible]一同社會主義の歌を唱へて十時に閉會した、

▲社會主義演説會

一月廿[illegible]日[illegible]、[illegible]意見よりして[illegible]質問あり

▲九州社會俱樂部例會（[illegible]）

一月十[illegible]日午後[illegible]時より[illegible]、[illegible]

▲横濱曙會より

今回曙會の[illegible]、[illegible]昨年八月當地に平民結社を起しました時は會員僅か十一人でありましたが、今や廿七人の多數となりました、此等の[illegible]内十四人とか加はるを[illegible]、[illegible]職業別な擧げますれば左の通りであります、

撰服仕立業	一人
日本商店員	一人
外國商店員	五人
郵便局員	二人
[illegible]業	一人
石材請負業	一人
學校關係者	三人
[illegible]局員	一人
[illegible]業	一人
印刷所店員	二人
畫工	一人
衛生事務員	一人
代書業	一人
浴場經營會員	一人
石版印刷業	一人
鐵道局員	一人
其他	三人

▲岡山いろは俱樂部

△時日　今月に限り十九日（第三日曜）午後　時

△會場　東中山下一番地（[illegible]）和栗氏宅

△會費　金五錢

何人たりとも出席を拒まず、多人數御來會あれ

▲神戸平民俱樂部第六例會

△時　二月十一日（第二土曜）午後六時より

△處　榮町通七丁目二七の一岡田[illegible]

△費　金五錢

△目印　平民俱樂部の提灯を吊してあります

諸君奮ふて御來會あれ

▲横濱社會主義演説會

横濱曙會[illegible]演説會は去る二日夜同市[illegible]に開かるべき筈なりしも、會場の都合に延期となれり、

▲社會主義演説會（日本橋）

去る一日[illegible]、[illegible]（石川）

●通俗社會主義

堺枯川

久しく豫告をして久しく違約をして居りましたが、種々なる事情の爲め、今度やうやく本紙に連載する事と定めました、即ち此號より始めて毎號約一頁はかりづゝ掲載し、凡そ十回にて完結とする豫定であります、完結の上は平民文庫五錢本として更に發賣する筈です

●平民文庫出版[illegible]

●社會主義入門

●消費組合の話

●ラサール

●土地國有論

●富の壓制

●マルクス

●經濟進化論

●火の柱

●良人の自白

●百年後の新社會

●理想鄉

發行所　東京市麹町區有樂町三丁目　平民社

西川光次郎著　▲定價拾錢郵稅二錢

富の壓制

再版に際して

一、此書は僅々たる小冊子なれども、余が[illegible]四年間、各所に[illegible]

[illegible]

發行所　平民社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

萬巻星淵君著
信仰餘賦 **小星** (初版賣切 再版近日發賣) 定價十八錢 郵税二錢

集むる所數十篇、是れ信仰上の感想を新體詩及短歌に賦したる者、毎篇の首に聖書の語句を標示して其精神を示す、傳ふる所は美文麗句に非ず亦巧想妙思にも非ずして靈の兄弟姉妹に頒たんとする希望と慰藉と也

加藤直士君譯 定價二十錢 郵税二錢
英和對譯 **ロバルトソンの美訓**
北亞米利加州沿岸日本人傳道監督イ、エー、ストルヂ博士序文

稻澤謙一君、手塚勇之助君譯述
四福音書研究 定價三十錢 郵税不要
人道ノ偉人 定價卅錢 郵税不要

米國博士トーレー氏著 新井正平君譯
聖書研究の栞 定價十五錢 郵税二錢

佐藤紅綠作
惡魔評定 定價三十錢 郵税二錢

福田銈二君著
處女の死と靈魂不滅 定價三錢五厘 郵税二錢

松永文雄君編
片岡健吉傳 (肖像入) 定價廿五錢 郵税四錢

同 君著
時代と青年 定價二十錢 郵税不要

高濱長江君著
嗚呼亡友 定價十錢 郵税二錢

大關和子著(東京看護婦會長)
派出看護婦心得 (再版) 定價十錢 郵税二錢

吉村大次郎君著
最近視察苦學生の天國 **青年の渡米** (五版) 定價廿五錢 郵税不要

島貫兵太夫君著
渡米策 (最近刊) 定價卅五錢 郵税不要

發行所 東京市神田猿樂町廿五番地 **中庸堂**

辯護士 東京麹町區上六番町二番地 **卜部喜太郎** 電話番町六二六番

新佛教 一月一日發行 第六巻 第一號

◉山上の説法、高島米峯◉商業と宗教、忽滑谷快天◉山青水長、橘惠勝◉新人、融悠而◉忙中閑語、小林雨峯◉家庭小言、鷄聲魔◉義務、伊藤左千夫◉年暮物語、杉村縱橫◉餘白錄、草の舍◉敎界名士評論彙集、黄洋◉認識の本質、千代女◉歌留多會、古川流泉◉礫川問答、石井光躬◉舍監室、境野黄洋◉無原稿記、毛利◉蚊帳の中、大内青巒◉答松本博士、富士川論◉割増の事、田中治六◉人格の顯現、三並良◉排運命觀、不受不施派の再興、欧洲の精神界と佛陀◉敎界人物觀彙集、米峯
◉一部郵税共拾壹錢◉半年分六拾一錢◉一年分一圓廿五錢◉郵券八厘用加

哲學館大學講師 松浦與三松先生編
英文武士道 定價廿四錢 郵税廿錢
倫敦タイムス紙上に現はれ世界の論壇を賑はしめたる彼の有名なる武士道論を中心とし其他英米第一流評家の武士道論を集めたるものにして戰勝國學生の必讀すべき書也

◉**將來之宗教** 現代名士卅餘氏述 定價郵税共八拾錢
◉賣捌所 東京小石川原町六 **鷄聲堂**

十九世紀の豫言者 住谷天來譯 (洋裝美本) 定價七十五錢 郵税八錢

(萬朝報評)十九世紀の豫言者として思想界の指南車として世界に欽仰せらるカーライル、ラスキン、トルストイの三賢を評傳せり、蓋し譯者西學に精しく文學に長じ且つ深く三家の人物に私淑する者故に叙事の繁簡頗る要を得、其風丰紙上に躍然として親しく謦咳を聽くの想あり云々。

(福音新報評)譯者の遒勁にして豪宕なる鐵筆を揮ふて世界三大偉人の性情と徑行と主義と奮鬪と名著と閲歴とを記述せらる、熱誠の筆、雄麗の文、沈痛にして奇趣あり、讀去讀來るの間、人をして天來の聖火に燃され偉人の風丰に接し、正義と人道の爲めに起つの思あらしむ云々

(帝國文學評)蓋し譯著は上記三人物に滿幅の同情を有する者、而かも文譯筆必ずしも精妙ならざれども、氣燃ゆるが如く、思想の俊高と譯筆の遒勁とを以てし行り詞を屬するの間一道の誠を通る者あり云々て直に人の肺腑に

發兌 東京市京橋區尾張町 **警醒社書店**

月刊雜誌 **廿世紀婦人**
▲二月一日發行 目次左の如し▼
▲カルタ會(今井歌子)▲婦人問題(老式部)▲軍人遺族慰問に關する私見(三輪田元道)▲新なる日本婦人の使命(白萩子)▲日本婦人の典型(衣通姫)(潮風生)▲性慾論(堺枯川)▲同情(川村春子)等小説には、侯爵夫人(クラスト著、志田素琴譯) 其他白山小集會、文林、雜錄、通信等也
▲一部金拾錢(郵税共) 六冊前金五拾五錢
東京麹町區飯田町五丁目卅七
發行所 **廿世紀婦人社**

東京神田區駿河臺鈴木町二番地(御茶の水橋畔)
電話本局 三八八八番 三八五五番
東洋内科醫院
院長 醫學士 **高田畊安**
診察 毎日午前、但日曜大祭休業、入院診斷後隨時應需、火木土曜日 往診、病室特設

神奈川縣相州高座郡茅ヶ崎海濱(停車場所在)
南湖院
副院長 醫學得業士 **林止**
診療 院長出診土曜午後、日曜大祭休業、入院診斷後隨時應需、副院長毎日午前、土曜午後診察、往診

新生涯
新刊發賣
田口掬汀君著
平福百穗君表紙意匠並口繪
菊判三百五十頁洋裝美本
定價八十八錢郵税八錢

品位高くして美しければ女は水仙の花の如しくけれ心も固うして行に正しければ白百合の花に似たり。男は此梅の青年と美人との運命を間に描きて蠱惑なる時代の人情の暗流を穿ち、寫せるは之れ久しく讀書家の渇望せしもの「新生涯」は美裝を凝らして世に出でたり

發行所 東京本郷三町目生田 **金色社**
東京上田 **大賣捌** 北海道 陸東 盛 **覺屋**

陰萎の特効藥
新藥 **スピーゲル ヨヒンビン**
ヨヒンビンは伯林大學敎授スピーゲル氏がヨヒンビン樹皮より發見されたる新藥にして陰萎症即ち生殖器不能の特効藥として發表せらる其効價の確實なる事は内外醫家の實驗に由て保證せられし所なり内服用錠劑と注射用結晶の二種あり陰萎患者は速に醫家に就て本劑の治療を乞はるべし(スピーゲルの冠字に御注意を乞ふ)◎
東京市南茅場町 三共商店藥品部

院長 醫學士 **鳥山南壽次郎**
鳥山内科院
午前診察 午後往診
京橋區鎗屋町十一番地 電話新橋千七百四十六番

男女生殖器病專門
内科 外科 **淚紅醫院**
東京神田連雀町十八 院長 醫士 一瀬鷹一
診察無料藥術料任意 電車萬世橋下

院長ドクトル **鈴木主計**
消化器病一般
京橋區采女町廿五 電話新橋一八四七
神田區錦町三ノ七 診察時間毎日午後
同 **鈴木胃腸病院** 同 分院

戰地郵便物發送の手引
本書は今や滿洲の野に對陣しつゝある我が同胞に對し自由に物品を送附する手續を詳記したるものにして書中載むる處の例證は悉く之れ實驗の事實を確實に親切と平易を旨とし記述したるもの故何人にも一目瞭然也、故に愛しき子、慕はしき夫、親しき友を戰地に有せらるゝ方にして心當の物品を郵送せんとせらるゝ方は是非一本を備へられ其の順序方法が如何に詳細に親切に説明しあるかを知られたし、更に附錄として改正徴兵例をも加ふ、(定價拾貳錢、郵税貳錢)
發賣所 東京市下谷區上野西黒門町一四 **盛光堂**

傳染病研究所 東京病院其他各病院御用 養生園
專賣特許 **アルボース**
ペスト、赤痢、コレラ 等の傳染病を恐るゝ者は日常アルボース石鹸を使用せよ又しつ、ひぜん、田虫等の皮膚病及霜やけ、垢切れ等の凍傷病一切にも有効なるとの世評高し▲定價原液一斤入金卅五錢通常液一斤入金拾三錢同卅五斤入金二圓▲石鹸大形金拾三錢同小形金八錢
東京深川區東扇橋町五番地 **扇橋製藥株式會社**
▲賣捌所 全國各藥店小間物店

◉**神經衰弱** 遺精早漏陰萎物起力記臆力衰退手淫の害 速治療法
◉**陰莖包皮無痛**
◉**梅毒・りん病・痔疾**
◉**婦人科** ◉せうかち◉子宮病◉血の道◉月經不順
◉地方患者は返信料添へ申込む可し
東京市神田區西今川町三番地 **愛生醫院**

麻病せうかち根治神劑 快淋丸
本劑は一等軍醫正草刈先生の處方に據り樂劑師田所繁松調製せし者にて輕きは一週間如何なる難症にても一ヶ月にて根治せしむる特効保證の神劑なり
價 藥(三日分 十五錢)(七日分 三十錢)(十五日分 六十錢)(一ヶ月分 一圓)
東京市中は即刻配達す◉全國無料送達す
發賣 神田區皆川町一番地 電話本局三千四十番 **一志堂藥局**

辯護士 東京市神田區錦町一丁目二番地 **花井卓藏** 電話本局八八三番

▲本紙定價 一部三錢五厘、廿部前金六十五錢、五十部前金一圓六十錢、郵税不要
▲廣告料 一行十九字詰三十錢
▲注文 は總べて前金に限る
▲郵券代用 にて御送金の場合は必ず一割増とし成るべく五厘の切手を用ひられたし

發行兼編輯人 原眞一郎
印刷人 山田金市郎
發行所 東京府荏原郡入新井村字新井宿二五五七番地 直行社
發賣所 東京市麹町區有樂町三丁目 **平民社**
印刷所 東京麹町三丁目二十一番地 株式會社 國光社 電話新橋特八八、新橋二六九三番